



[評者]

頭木 弘樹

文学紹介者

緩和ケア・コミュニケーションのエビデンス

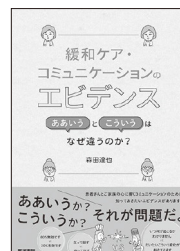
ああいうとこういうはなぜ違うのか？

森田 達也 著，森 雅紀 執筆協力

●A5 頁168 2021年6月

定価：2,200 円（本体 2,000 円＋税）

[ISBN978-4-260-04586-5] 医学書院刊



病院に行くとき，録音機を持って行こうかと迷う．説明を覚えきれないからだ．いい加減に聞いているわけではない．その逆で，1つひとつの医師の発言に集中し，ちゃんと理解しようとしている．それだけに咀嚼に時間がかかり，次々に繰り出される言葉を飲み込みきれなくなる．

しかし，いまだに持って行ったことはない．医師のショッキングな発言が録音されるといやだからだ．消せばいいだけなのだが，録音されたらと思うだけで，もう胸が苦しくなり，やめてしまう．

それくらい，医師や看護師の言葉は患者に突き刺さる．医療者が1度発しただけの言葉を，患者は何百回も反すうすることがある．病院の待合室で話していると，「20年前のあの医師の言葉がいまだに忘れられない」などという人がたくさんいる．

もちろん，患者側が過敏すぎる面もある．医療者は大勢の患者を相手にしているわけで，全員に気を遣ってははいられない．治療さえちゃんとやってくれれば，言葉とがめはなるべくしたくないと思っていた．

だからこの本も，読む前は，「患者の気持ちをわかってあげましょうと書いたところで，現実には難しいのでは？」と思っていた．ところが，そういう本ではなかった．「相手をわかろうとすることがどういうことか生まれついて『わからない』人に自然なコミュニケーションを求めるのは酷」とまで著者は断じている．医療者にだって，当然そういう人はいる．「人は共感性も態度もなかなか変えられない．それならば，せめて，

ああいう・こういうを工夫する」という，じつに現実的な本で，目からウロコだった．

実際，この本に書かれている工夫は，患者の側から見て，「ぜひそうしてほしい！」と思うことばかりだ．例えば副作用の説明で「5パーセントに吐き気が起こる」と「95パーセントで吐き気は起こらない」では，たしかに言われる側としては大違いだ．しかも，そのような言い方をすることで，「副作用の発生率を減らすことができる」ということに驚いた．

客に愛想がよくてまずい鮎屋より，無愛想でもうまい鮎屋のほうがいい．医療者に関しても，そういうふうになってしまうところがある．しかし，この本を読むと，患者への言い方を気をつけることは，治療ともなり得るのだ．これも目からウロコだった．

患者の「言葉と意図は違うことがある」と著者が認識していることにも深く感動した．それが原因の医師と患者の行き違いは，入院中に6人部屋でたくさん目にした．それがどういうことかは，この本に出てくる事例を読んでみてほしい．事例が豊富なのも，この本のありがたいところだ．

というわけで，読む前とは完全に考えが変わり，今はすべての医療者にこの本を読んでもほしいと思っている．自分の主治医にも．

また，ここに書いてあることは，医療者と患者だけでなく，さまざまなところに活用できると思った．私自身，仕事やプライベートでも，ああいう・こういうを工夫してみるつもりだ．